"学ぶ"に寄り添う
コミュニケーションマガジン

社内報アワード
受賞

NEWS LETTER
SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.
286
Sep.2023

特集

聖学院の歴史

ルーツは140年前にあり！

巻頭座談会

4人の教員によるトークセッション

菊地 順
村松 晋
杉淵 洋一
赤田 直樹

軌跡
聖学院各校・各園の歩み

記念祭／ヴェリタス祭

聖学院創立120周年
イベントニュース

聖学院高校・女子聖学院高校合同
「歴史探訪プロジェクト」
発祥の地を訪ねて

聖学院の源流を探る旅
秋田探訪

SEIGAKUIN 120 YEARS 1903 - 2023
神を仰ぎ 人に仕う
140th Anniversary of the Disciples' mission to Japan

写真＝聖学院神学校校舎前の記念写真

女子聖学院　旧講堂での中学読書感想文
コンクール優秀作発表会

& Seig NEWS LETTER

SEIGAKUIN NEWSLETTER

No. 286
Sep.2023

CONTENTS

特集
01_ **聖学院の歴史**
ー ルーツは140年前にあり！ー

4人の教員によるトークセッション
菊地 順　村松 晋
杉淵 洋一　赤田 直樹
03_ &Talk

09_ **軌跡**
聖学院各校・各園の歩み

11_ 記念祭／ヴェリタス祭

聖学院創立120周年
12_ イベントニュース

聖学院高校・女子聖学院高校合同
「歴史探訪プロジェクト」
13_ **発祥の地を訪ねて**

14_ Seig NEWS

聖学院の源流を探る旅
17_ **秋田探訪**

18_ 聖学院の歴史（年表）

120年の轍を歩む
19_ **聖学院歴史探訪**
ー聖学院の創設と発展　女子聖学院 2ー
[EPISODE #22]

聖学院ニュースレターアンケート

QRコードから本誌の感想をお寄せください。アンケートに回答いただいた方の中から抽選で10名様に「聖学院120周年記念オリジナルコースター」をプレゼント！ いただいたご意見は、編集の上、本誌にてご紹介させていただくことがあります。

●有効回答期間
2023年9月29日～2023年11月24日

●当選発表
当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。

本アンケートに関するお問い合わせ
聖学院広報センター Tel 03-3917-8530

編　　集／学校法人聖学院 広報センター
デザイン／株式会社キュー・ジー
発 行 日／2023年9月21日

特集

聖学院の歴史

― ルーツは140年前にあり！ ―

「聖学院」と名を冠する学校が創立してから今年で120年。

120周年を迎えるにあたり、聖学院の歴史を見つめ直す機会が増えてきました。

その歴史を辿ると、創立よりさらに20年遡る140年前に、創立につながる4人の宣教師がアメリカから日本に渡ってきたことがわかります。そして決して平たんではない命がけの宣教の軌跡が浮かび上がってきます。

我々聖学院のルーツはどのようなものだったのでしょうか、そしてそこから続く道は、どんな軌跡を残してきたのでしょうか?

道なき道を突き進んだ先人たちに想いを馳せながら、聖学院のルーツと歴史を、この120周年の時にあらためて皆さんと一緒に確かめていきたいと思います。

女子聖学院小学部初の運動会

聖学院中学校　創立30周年記念体育館

女子聖学院中高　本館落成式･定礎式

&Talk

特集　聖学院の歴史 ― ルーツは140年前にあり！ ―

牧師であり聖学院の歴史に詳しい菊地順先生、
日本のプロテスタント史に造詣の深い村松晋先生、
秋田県出身で文学とディサイプルス派の伝道に詳しい杉淵洋一先生、
ディサプルス派の伝道ともゆかりの深い秋田の幼稚園で園長を勤め、
現在聖学院みどり幼稚園園長である赤田直樹先生。
それぞれの専門分野から光を当てることで
先人たちの軌跡を立体的に考察します。

杉淵（すぎぶち） 洋一（よういち）

聖学院大学人文学部日本文化学科准教授。愛知淑徳大学初年次教育部門講師等を経て現職。秋田県男鹿市出身、秋田県立秋田高等学校を卒業。専門は日本近現代文学、比較文学、文学理論。著作に『有島武郎をめぐる物語――ヨーロッパに架けた虹』（青弓社2020）等がある。

村松（むらまつ） 晋（すすむ）

聖学院大学人文学部日本文化学科教授。近現代日本思想史専攻、博士（文学）。近著に『近代日本のキリスト者――その歴史的位相』（聖学院大学出版会、2020年）、「アジア・太平洋戦争期『日本基督教』の射程――その神学的可能性の検討」（『日本の神学』62号、日本基督教学会、2023年9月）等。

菊地（きくち） 順（じゅん）

聖学院大学政治経済学部特任教授、聖学院大学総合研究所所長、前キリスト教センター所長。近著に『ティリッヒと逆説的合一の系譜』（聖学院大学出版会、2018年）、『M・L・キングと共働人格主義』（同、2021年）等。

赤田（あかだ） 直樹（なおき）

聖学院教会牧師、聖学院みどり幼稚園園長・チャプレン、学校法人聖学院評議員。「キリストの教会」（有楽器派）の牧師家庭に生まれる。聖学院大学人文学部欧米文化学科卒業後、東京神学大学・同大学院で学ぶ。滝野川教会副牧師、秋田高陽教会牧師・秋田幼稚園園長として働いた後に現職。

聖学院はディサイプルス派の宣教師が日本での伝道と、社会貢献のために作った学校です。H・H・ガイが1903年に聖学院神学校を作り、その3年後に聖学院中学校を設立。バーサ・F・クローソンが聖学院中学校に先立ち女子聖学院（神学校・1905年）を開校しています。さらにその先人として日本での伝道を始めたのは4人の宣教師であるガルスト夫妻とスミス夫妻です。彼らは今から140年前の1883年に来日し、翌年の1884年に秋田から伝道を始めます。鎖国が終わり近代化を急ぐ日本に来た宣教師たちの旅が、どう教育につながるのか。4人の先生にお集まりいただき、聖学院の創成期をうかがいました。

身の回りの人々に手を差し伸べることから始まった伝道

――ディサイプルス派の伝道は秋田から始まります。なぜ秋田だったのでしょうか？

赤田　当時日本にいる宣教師の間で様々なネットワークがありました。ガルストとスミスが日本に来て横浜に滞在している時、他の教派のポート宣教師という方が2人に「まだ宣教師が1人も入っていない、秋田はどうか」とアドバイスをしてくれたそうです。2人はそれを神様のご計画だと受け取って秋田に行ったそうです。

杉淵　ポート宣教師はその時点で10年以上盛岡を中心に宣教していてかなり日本語が堪能だったようです。ガルストとスミスは秋田で武家屋敷を借りて、そこを拠点にしています。その武家屋敷を借りる時もポート宣教師がとても力になってくれたそうです。

村松　明治維新以降、日本のクリスチャンは佐幕派（※1）出身の士族を中心に広まります。つまり明治新政府のもとでは社会的に上昇しづらい人たちがクリスチャンになっていきます。たとえば東北の場合、諸藩は戊辰戦争において奥羽越列藩同盟という新政府と対立する姿勢を取っていました。しかし戊辰戦争に敗北の結果、この同盟にかかわった諸藩は明治新政府の元では立場を失います。それがキリスト教への内面的な渇きにつながっていきました。旧仙台藩士の中には函館を訪れ、正教会のニコライに出会った人々がいます。彼らは日本を新しくしていくのはキリスト教だと確信し、ハリストス正教を受け入れ、熱心に教えを伝え、北東北を中心に教会が成立しました。他にも、明治学院創立に関わった井深梶之助は会津藩出身ですね。東北以外でも、たとえば内村鑑三は佐幕派藩士の子弟ですし、植村正久は旗本（※1）の家の出ですから、いずれも新しい時代の「陰」に置かれた人たちです。

一方秋田は東北でごく少数の官軍側（※1）です。そのため周辺諸藩に比べてキリスト教への渇望が希薄だったのではないかと思います。これは仮説ですが、ガルストとスミスが来日時に秋田が取り残された状況にあった理由の一つにそういった事情もあったのではないでしょうか。

杉淵　地形的な影響も大きかったと思います。ガルストとスミスが秋田に行った時は日本に鉄道がほとんどありませんでした。けもの道のような陸路を行くか、横浜から船で津軽海峡を渡るしかありません。先日のニュースで取り上げられていたように、秋田は夏に雨が降ると豪雨になって川が氾濫しますし、冬になれば、奥羽山脈が雪で埋もれ孤立します。秋田へ行くのには多くの困難がつきまとったのだと思います。

赤田　秋田に行くと決めた時に、ガルストとスミスは周りの宣教師たちから「とても危険だからやめた方が良い」と言われたそうです。

――それでも秋田に行ったガルストとスミスはどのような人物だったのでしょうか？

杉淵　当初ガルストとスミスはアフリカに行きたかったそうで、未踏の地を選ぶようなフロンティアスピリッツの持ち主だったようです。私が調べた印象では、ガルストはとても情熱的で気持ちが強い人物です。そのため秋田でやってやるという気概があったのではないかと思います。

菊地　来日前の話ですが、ガルストは、妹が同じディサイプルス派の洗礼を受けたいと言った時、次の日曜まで待たずに「すぐ教会に行こう」と言ったそうです。決断力と実行力に富んだ人で、それ

それぞれの専門分野から意見を交わす先生方。

創立当時の聖学院中学校校舎

が行動の端々に出ていると思います。

杉淵　ガルストは秋田県の近代化に対してもいろいろ助言をしています。地元の有力者に発電と送電、鉄道と工場を作らなければ近代化できないということを言っています。だからガルストはキリスト教の伝道というより西洋型の近代化を秋田に起こそうとしていたのではないかとも感じます。まずは身近な人たちの暮らしを考え、その流れの中でクリスチャンになってくれる人がいれば良いという人物だったという印象がとても強くあります。

ガルストは45歳で亡くなります。その際夫人に遺言を聞かれ、「My life is my message.」と答えています。「私の人生が私のメッセージだ」という最後の言葉にも実行の人だったということが見て取れます。

赤田　ガルストはどんどん外に出ていくタイプだったようです。秋田に来てから数週間のうちに40キロ以上離れた本荘に行ったり、また100キロ近く離れた院内というところにも行っています。

菊地　一方スミスは秋田を中心に伝道しています。

杉淵　スミスは非常に控えめな人で、あまり表立ったことはしない人でした。動のガルスト、静のスミスという感じで、もしかしたらバランスを取っていたのではないかという気がします。

――秋田での伝道と、地元の人たちの反応はどうだったのでしょうか？

赤田　秋田はキリシタン時代に多少キリスト教が入っています。ただやはりその人たちへの弾圧があったので、恐らくキリスト教への警戒心が強かったと思います。

杉淵　そもそも西洋人が来ること自体がとても珍しいことだったので、地元の人たちがガルストたちが住む武家屋敷の障子に穴を開けて覗きに来ていたそうです。ただそういうことに負けない人たちなので、秋田に来てすぐに聖書を販売したり、バザーを開いたり、講演会などを催したりしました。スミス夫人は最終的には日本語で演説ができるようになったという記録が残っています。

菊地　スミス夫人は地元の女性たちを集めて生活に役立つことを教えていました。いわゆる伝道だけをしていたのではなく、生活全体で秋田の人たちの中に入っていこうと努力していたのだと思います。そのスミス夫人が1年も経たないうちに亡くなります。そのことも周囲の人々に大きく影響を与えたようです。遠くアメリカから秋田に来て人生を終える、そのことを通して神の福音を伝えようとした姿勢が人々の心を開いていったと記録にあります。やはり行動といいますか、生き様が徐々に受け入れられていったのではないでしょうか。

赤田　とても貧しい人たちが信徒になったという記録があります。（秋田以外は）キリスト教は士族に受け入れられやすいというお話がありましたが、ガルストたちの姿勢として、上位階級から伝道しようとしたのではなく、日々大変な思いをしている人たちにこそ伝えようとした様子がうかがえます。

村松　親のない子どもなど社会的弱者に最初に働きかけたのは日本の場合、どちらかというとカトリックですよね。プロテスタントは先ほども述べたように士族や豪農に入っていった傾向があります。そのような中においてガルストたちは物心両面において、貧しい人たちの生活の中に入っていきました。そのようなあり方はとても貴重だと思います。その流れに聖学院があることは大変誇らしく感じます。

伝道から教育へ

――宣教師たちが学校を作ることになった経緯を教えてください。

菊地　まず基本的に、聖学院も含め宣教師たちが作った学校というのは、伝道者を養成するためのものでした。日本人の伝道者を生み出し伝道を広げるための学校です。現在のような一般教育を行う学校とは少しニュアンスが異なっていました。日本に来た宣教師たちは最初熱心に伝道を行っていまし

聖学院の名前の由来

聖学院中学校の初代校長石川角次郎は、聖学院は「聖なる学院」ではなく「聖学」の院であると語っています。では「聖学」とはなんでしょうか？
1903年にガイが神学校を開いた時の校名は、最大の寄付者の名を冠してドレーク・バイブル・カレッジと名付けましたが、その後聖学院という名前になります。聖学院という名前は、当時ガイと石川角次郎と神学校教授の宮崎八百吉の3人で決めたであろうと推測されています。その背景には、当時ヨーロッパで「聖」についての価値をめぐる議論が盛んだったという状況があったようです。例えば学問と道徳と芸術の頂点を意味する真善美、それらをくくるさらなる上位のものとして「聖」があるという議論などがありました。ガイはアメリカに一時帰国し勉強しているのでヨーロッパのそういう動向を知っていたのではないかと思われます。この「聖」を学ぶのが「聖学」で、聖なる人（キリストの弟子「ディサイプル」）を育てるという思いに基づいて名付けられたのではないかという説があります。
ちなみに旧約聖書の元々の言語のヘブライ語では「聖」は「カードーシュ」と言い、この元々の意味は「分ける」という意味です。この世のものから分離されたものが聖なるものです。従って聖学院の「聖」も日本で浸透している「清い」というニュアンスとは少し異なります。

た。しかし日本人の伝道者の必要性を感じ、学校が作られるようになります。ガルストも当初はそういう教育は恐らく考えていなかったと思います。聖学院神学校を作ったガイが来日したのはガルストの10年後でした。

赤田　日本に外国人が滞在するためには現在のビザのようなものが必要でした。ガルストは、外国人の滞在目的を作るため、秋田英和学校というものを作っています。

菊地　それは宣教師が国内を移動できるように？

赤田　それと長期滞在のためです。ただ、スミスやガルストも教鞭をとっていますし、その後、ミスハリソンなど後続の宣教師も授業をしています。伝道と教育を共に行っていて、ガイが聖学院神学校を作る流れにつながっているのかもしれません。

菊地　ガイは聖学院神学校に先駆け、1896年に一度私塾を作っています。ガルストが病気になったことで頓挫した記録がありますから、やはり両者の間に協力関係はあったと思いますね。

村松　私の専門の方から言うと、日露戦争前後の時期は若者が将来に希望を持てない、まさに「生きづらさ」が広まった時代なんですね。大日本帝国の見かけの「発展」とは裏腹に、世の中には閉塞感が広がり、いわゆる社会問題も表れ始め、物心両面で苦しむ人が多く出ました。1904年は自殺者が1万人を超えたという説があるほどです。若い人たちが精神的な支柱を求め、新渡戸稲造や内村鑑三のもとに集まってきたのもこの時期です。それだけに1903年の聖学院神学校設立はミッション側の判断に加え、明治末期の閉塞した日本を、キリスト教によって新たに切り拓こうとする主体的な意志も関わっていたように思います。

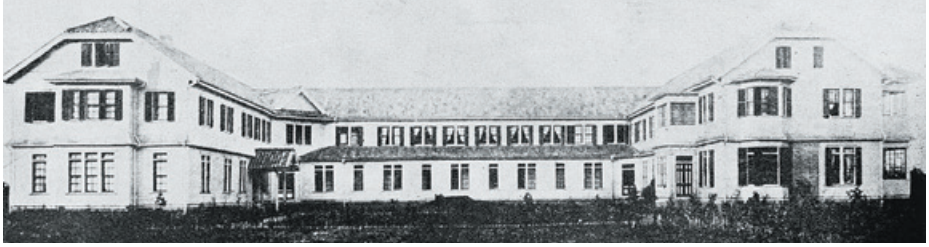
杉淵　秋田としては秋田英和学校はとても大きな意味を持ちます。当初は宣教師の長期滞在のために作られた学校ですが、教育分野にも力を入れるようになります。ガルストから洗礼を受けた評論家の青柳有美（ゆうび）(※2)が、この学校から巣立った後、教師として秋田の多くの若者たちから支持されていたことなどは、秋田英和学校の教育がとても魅力的であったことを物語っています。この学校で洗礼を受けた人が東京のミッションスクールで働くなど、秋田から都会に出て行く一つの流れを作ったように感じます。また、秋田英和学校とは直接関係ありませんが、反戦平和を謳った日本最初のプロレタリア文学雑誌『種蒔く人』の創刊同人の一人も、秋田で伝道する人々の姿に心を打たれて、ディサイプルス派に入信しています。

―聖学院神学校と女子聖学院は、ほぼ同時期に作られています。何か意図があったのでしょうか？

菊地　基本的には別々に始まっています。女子聖学院は、日本の伝道における学校の必要性を感じたアメリカの外国クリスチャン伝道協会が設立を提言しています。特に牧師となった人を支える女性の必要性を考え、女子教育が重視されていました。そういったビジョンの中、すでに日本の大阪にいたクローソンに白羽の矢が立ち、1905年に女子聖学院が作られます。それに対し、聖学院神学校はガイの強い思いから始まっています。ガイは私塾が頓挫した後、休暇でアメリカに戻ります。その際に様々な人に働きかけ、資金を集め、聖学院神学校設立が実現します。

聖学院神学校は東京の本郷から始まり、今の中里（駒込）に移り聖学院の基礎を作ります。一方、女子聖学院は築地から始まりました。そしてそこを離れる時、当初の予定していた場所への移転が難航します。奇しくもそのタイミングで同じディサイプルス派の聖学院中学校の隣に、たまたま空いている広い土地があったので中里に移ってきました。今二つの学校がその一角にあるというのは、そういう意味では偶然とも言えます。ただ石川角次郎（かくじろう）が女子聖学院の評議員をやったりと、緩やかな協力関係はありました。

赤田　聖学院神学校を作るにあたり、すでに聖学院中学校を作る話がガイと



創立当時の女子聖学院の校舎と寄宿舎

聖学院中学校初代校長を務めた石川角次郎の中ではあったという記録があります。

菊地　聖学院中学校は石川角次郎に校長になってもらう約束をとりつけて始まったということです。そのあたりにガイと石川角次郎の親密な関係性がうかがえます。

――ガイ博士、石川角次郎先生、クローソン先生はどのような人物だったのでしょうか？

菊地　ガイは非常に能力の高い人であったと思います。ギリシャ語やラテン語に精通し、日本語も堪能でした。ガイが隣の部屋で話していると、日本人が話していると思われるほどだったそうです。石川角次郎が亡くなった時、ガイはすでにアメリカに帰国していたのですが、教育使節団の団長としてたまたま日本に来ていました。石川角次郎の葬儀に参列したガイは、東洋の思想や仏教用語も引用しながら弔辞を述べたそうです。

　石川角次郎は結構ユーモアがある人だったようです。例えばデモクラシーという言葉を学生に教える際「でも暮らしいい」と駄洒落を交えて教えた逸話があります。後に聖学院理事長になる甥の石川清氏も、角次郎は面白い伯父さんだったと記しています。人間味に溢れる人だったようです。だから生徒からも慕われていたと思います。

　クローソンはスクールマザーと呼ばれていました。学校の母と呼ばれるぐらい生徒から慕われたということです。遊びに出かけた生徒が夜遅くまで帰らなかった時も、生徒を怒らず一緒にお茶を飲んで話をしたというエピソードがあります。

　石川角次郎はアメリカ留学中にディサイプルス派に入ります。帰国後ガイと出会い、教育に対する考え方で意気投合します。学校で直接生徒に伝道するのではなく、授業を通して伝道する。一般教育を通してキリスト教を伝える。この姿勢が二人の共通点でした。そういう形での伝道の精神は今でもずっと貫かれていると思います。それは聖学院の良い伝統だと思います。

村松　当時はまだ中里の辺りは滝野川村ですから今で言う東京という感じではなかったのでしょうね。

菊地　何もない本当に田舎でした。

村松　明治末期から大正にかけての中里は北に行くと軍関係の施設がいくつもあって、一方で東に進むと膨張する東京から遠ざけられた工場や施設が集積した地帯があり、そこで働く人々は、いわれなき差別や偏見にさらされることもありました。どちらも近代日本の「陰画」と呼び得る場所ですが、中里はそういう地域と近かっただけに、聖学院神学校から生まれた滝野川教会にしても聖学院中学校にしても、いわゆる「ハイクラス」の人たちではなく、隣接する地域の労働者や社会的に困窮している人たちへの伝道や教育を自覚的に行なっていた可能性はありませんか？

菊地　それはあると思います。

杉淵　私もその点については、やはりガルストの意思を受け継いでいると思います。

菊地　ガルストは貧しい人たちにとても心を寄せた人です。妻ローラの書いたガルストの伝記の原文には、日本人の10年間の生活費の比較資料が出てきます。ガルストはその伝道を通して日本人の困窮を知っただけではなく、そうした客観的な資料にも当たって、それを的確に把握しながら、身の回りの困窮者に対して非常に具体的に関わっていたのです。当時、アメリカも南北戦争や産業革命による工業化に端を発する労働者の問題を抱えていました。同じような構図をすでに経験済みだったのです。ガルストはそうしたアメリカを参考にしつつ日本人の救済ということを考えたのだと思います。

なくなっていたかもしれない聖学院の危機

――聖学院にとってターニングポイントとなる出来事はありますか？

菊地　1932年、平井庸吉（つねきち）が聖学院中学校と女子聖学院の校長を兼任したことだと思います。それに先立つ1930年12月に聖学院中学校校長の石川角次郎が亡くなります。それは聖学院にとって大きな痛手で、後任が1年も決まりませんでした。平井庸吉はガイのもとで学んだ人物で、すでにクローソンの跡を継いで女子聖学院の院長（＝校長）に就任していました。しかし、やはり石川角次郎の後任は平井庸吉しかいないということで兼任が決まりました。平井庸吉はそれから8年間ずっと両校の校長を務めます。その間、教職員の交流が積極的に行われ、今の聖学院の基盤になりました。

　さらに1929年の世界恐慌の影響

で、アメリカの教会からの援助が断たれます。それまで女子聖学院はアメリカからの援助で成り立っていましたし、聖学院中学校も多くの支援を受けていました。この危機に際し、教職員の俸給を減俸する一方、保護者会の理解と協力を得て授業料の増額を図るなどし、乗り切ったのが平井庸吉でした。平井庸吉によって、もともと別の学校だった男女両校が一体化し、経済的に独立したというのが一番のターニングポイントだったと思います。

受け継がれてきたものと受け継いでいくもの

杉淵　ガルストは農学の学校を出ていて、秋田ではその知識や経験を存分に生かせたと思います。自分が身につけたことをどうしたら周囲の人たちに還元していけるのか、秋田での伝道はそういうことを考え、今日の聖学院につながる教育のノウハウを学ぶ場にもなったのではないでしょうか。それが今日の聖学院のスタンスにも確実に受け継がれていると思います。

村松　杉淵先生がおっしゃったように、聖学院にはその地域に根ざし、地域の人々のために教育を行うという意思があるように感じます。偶然でもあるのでしょうが、東京の中心部ではなく周縁部に位置し、額に汗して働く人々に囲まれた中里の地に聖学院が立ち上がったことは、ガルスト以来の聖学院の志の表れのように思います。それを大事にしていってほしいです。

菊地　本当に私もそう思います。ちゃんと地に足のついた伝道をしてきたということだと思います。その自分たちのアイデンティティをしっかり持って、一歩一歩たゆまず前進していくことが大事だと思います。

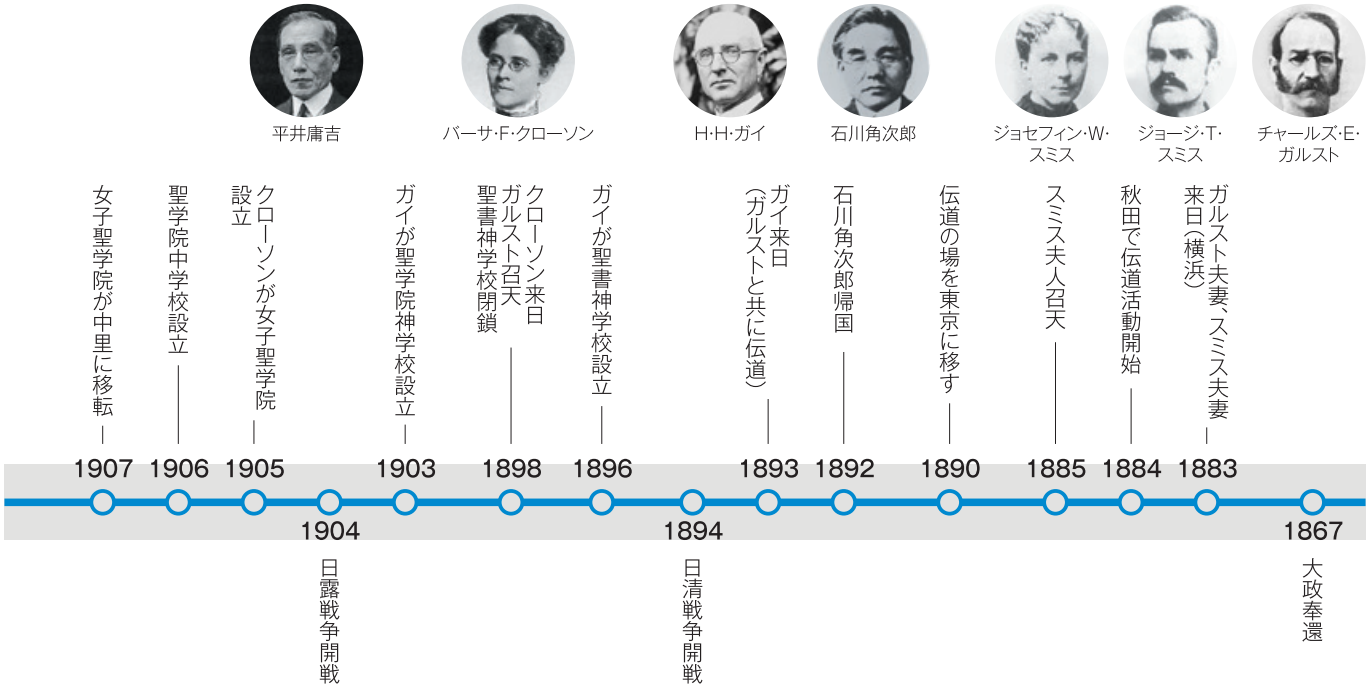
赤田　「My life is my message.」の言葉のように命をかけて神様の愛を伝えてくれたことが、今も各学校各園に浸透していると思います。今度はそれを自分たちの次の世代に伝えていきたいですね。

菊地　ガルストが最期に言った「My life is my message.」という言葉、実はマハトマ・ガンジーも同じことを言っています。調べた限り接点がないので、たまたま同じ言葉を言ったのだと思いますが、ガンジーは同時にこうも言っています。「Your life, too, must be your message.」あなたの人生もあなたのメッセージにならなければならない。この記事を読んだ方には、ぜひそういう志を持っていただけたらうれしいです。

（取材日／2023年8月）

※1　佐幕派・旗本・官軍
佐幕派とは朝廷権力の復活を目指す勤王派に対して江戸幕府政策を擁護する勢力。旗本とは江戸時代1万石未満の幕臣（江戸幕府の家臣）の総称。官軍とは朝廷方の軍隊。勤王派。

※2　青柳有美
明治から昭和前期のジャーナリスト、随筆家。明治26年から「女学雑誌」にかかわり、のち主幹。大正には「恋愛文学」「有美臭」「有美道」などがある。
（参照元：コトバンク　https://kotobank.jp/）



※チャールズ・E・ガルスト（1853～1898）…オハイオ州立大学（農学）、ウエストポイント陸軍士官学校を卒業後、8年軍部に服する。その間、海外宣教の準備をし、1883年に妻ローラとともに来日。当時30歳。1898年日本で逝去。
※ジョージ・T・スミス（1843～1920）…アメリカで十年間牧師をした後、1883年に妻ジョセフィンと来日。当時40歳、6歳になる娘がいた。1892年に帰米。
※ジョセフィン・W・スミス（1850～1885）…横浜から夫に2ヶ月遅れて娘と秋田に着任。編物教室を開くなどしながら伝道に従事。翌年3月、次女出産後逝去（次女も亡くなる）。
※石川角次郎（1867～1930）…アメリカで留学中にディサイプルス派の洗礼を受け、帰国後にガイと出会い意気投合。学習院大学教授を辞して聖学院中学校初代校長となる。
※H・H・ガイ（1870～1936）…1893年、夫人とともに来日。聖学院神学校、聖学院英語夜学校、聖学院中学校を設立。1907年夫人の病のため帰米。
※バーサ・F・クローソン（1868～1957）…1898年来日。大阪を中心に伝道活動。その後1905年女子聖学院初代院長となる。1937年に帰米。
※平井庸吉（1871～1947）…1895年ガイの聖書学校に入学。卒業後、大阪を中心に伝道活動。1924年女子聖学院の第2代院長となる。1932年から聖学院中学校第2代校長を兼務。

軌跡

聖学院
各校・各園の
歩み

聖学院小学校設立

聖学院小学校

1960年に「女子聖学院小学部」としてスタートしました。最初は、現在の女子聖学院の敷地内にあった家政館と呼ばれる建物の一室で授業を行っていました。1961年に女子聖学院が校舎を新築したことに伴い、小学部は家政館から女子聖学院高等部が使っていた校舎（現在の聖学院小学校の敷地）に移転しました。その後1966年に女子聖学院小学部から聖学院小学校へと改称し、現在に至っています。2014年には新校舎が完成し、子どもたちは元気いっぱいに遊び、学び、祈りながら、生き生きと毎日の生活を送っています。

現在の校舎

1968年頃の校舎

聖学院幼稚園設立

聖学院幼稚園

1912年に開園した中里幼稚園は滝野川教会の附属幼稚園の時期を経て、1943年に女子聖学院附属となり聖学院幼稚園に改称されました。写真は1937年頃の園庭。大正、昭和の初めには幼稚園の近隣の地域に多くの文士や芸術家、文化人、財界人が住んでいました。聖学院幼稚園の前身である中里幼稚園には芥川龍之介、室生犀星、平塚雷鳥らの子息や、多くの実業家の子息が通っていたという記録があります。

年	和暦	出来事
1903	明治36年	聖学院神学校を設立（のち青山学院神学部と合同）
1904	明治37年	日露戦争開戦
1905	明治38年	女子聖学院神学部を設立
1906	明治39年	聖学院中学校を設立
1908	明治41年	女子聖学院普通部を設立
1912	明治45年	中里幼稚園（現聖学院幼稚園）を設立
1913	大正2年	女子聖学院家政学部を設立
1923	大正12年	関東大震災
1926	大正15年	女子聖学院普通学部を本科、神学部を神学科、家政学部を高等家政科と改称
1938	昭和13年	女子聖学院本科を高等女学科に改称
1941	昭和16年	太平洋戦争開戦
1943	昭和18年	中里幼稚園を女子聖学院附属幼稚園に改称
1945	昭和20年	太平洋戦争終戦
1947	昭和22年	学制改革に伴い聖学院中学校、女子聖学院中学部を設立

「神を仰ぎ 人に仕う」

女子聖学院中学校・高等学校

女子聖学院中高校歌の3番に、「つつましき心をもて　神を仰ぎ　温かなる思いをもて　人に仕（つこ）う」という歌詞があります。この歌詞は、イエス・キリストが弟子たちに語られた聖書のことばを平井庸吉と作詞者でまとめたものです。「イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」（マタイによる福音書22章37～39節）。この歌詞から聖学院の建学の精神を表す「神を仰ぎ　人に仕う」の言葉が生まれましたが、この二句にまとめたのは小田信人（おだ・のぶんど）女子聖学院第3代院長です。

「真・善・美」をすべくくる「聖」

聖学院中学校・高等学校

聖学院中高校歌の3番に、「ここにて学ぶ　真善美を　ひとつの聖にすべくくりて　神と人とにささげつくす　これぞ我らの　貴き使命」という歌詞があります。石川角次郎初代校長が掲げた聖学院の「聖」の理念が表され、「聖人を育てる」学校としての使命が歌われています。「聖学院」という学校名には、この「聖」を学んだ「聖人を育てる」学校であるという創立者ガイや初代校長石川角次郎の思いがこめられています。

校歌に見る聖学院の理念

聖学院中高　**女子聖学院中高**

1932年～1940年まで、平井庸吉（ひらい・つねきち）女子聖学院第2代院長が、聖学院中学校第2代校長を兼務した時代がありました。聖学院中高と女子聖学院中高の校歌は、どちらも平井庸吉時代の1936年に、同じ作詞・作曲者（作詞:由木　康（ゆうき・こう）、作曲:大沢寿人（おおさわ・ひさと））によって作られました。両校の校歌には、聖学院がどのような教育を行っていくのか、創立者の次を担った平井庸吉の思いが強く表されています。

聖学院アトランタ国際学校の歩み

聖学院アトランタ国際学校

聖学院アトランタ国際学校は1990年、アメリカ·ジョージア州のアトランタの中心地にあるオグルソープ大学の広大なキャンパスの一角に開設しました。平和を創り出す国際人の育成を目標として、日米両文化の良さを結びつける役割を果たすため、先駆的な教育を実践。特に日本語と英語の二言語を習得する「ツーウェイ·イマージョン教育」に力を入れる等、2018年に閉校されるまで海外子女教育の一翼を担いました。

伝統を受け継ぐクリスマスイベント

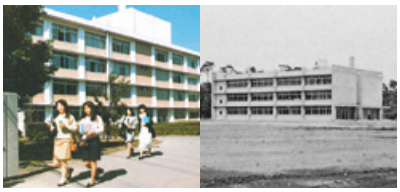
聖学院大学 **女子聖学院短期大学**

さいたま·上尾キャンパスでクリスマスツリー点火祭が始められたのは、女子聖学院短期大学時代の1982年。その後は聖学院大学に受け継がれ、南キャンパスにそびえるヒマラヤ杉のツリーが、今では地域のクリスマスのシンボルになっています。

女子聖学院短期大学の歩み

女子聖学院短期大学

1967年4月、埼玉県上尾市に女子聖学院短期大学は設立されました。キリスト教女子高等教育機関として女子教育に寄与してきましたが、聖学院大学への改組転換を経て、1999年3月（※）をもって32年に及ぶその歴史を閉じました。短期大学が築いてきた伝統は、大学に受け継がれています。
（※文部科学省による正式な廃止の認可は2001年3月）



- 2018 平成30年　聖学院アトランタ国際学校閉校
- 2014 平成26年　聖学院小学校 新校舎竣工
- 2012 平成24年　聖学院幼稚園 新園舎竣工
- 2007 平成19年　女子聖学院中学校·高等学校 新校舎竣工
- 2004 平成16年　聖学院大学チャペル竣工
- 1999 平成11年　聖学院中学校·高等学校 新校舎竣工
- 1998 平成10年　女子聖学院短期大学募集停止
- 1996 平成8年　聖学院大学大学院（政治政策学研究科政治政策学専攻（修士課程））設立
- 1993 平成5年　女子聖学院短期大学付属幼稚園を聖学院みどり幼稚園と改称
- 1990 平成2年　聖学院アトランタ国際学校設立
- 1988 昭和63年　聖学院大学（政治経済学部政治経済学科）を設立
- 1987 昭和62年　女子聖学院チャペル棟竣工
- 1978 昭和53年　女子聖学院短期大学付属幼稚園（現聖学院みどり幼稚園）を設立
- 1967 昭和42年　女子聖学院短期大学を設立
- 1966 昭和41年　女子聖学院中学部·高等部·小学部·附属幼稚園の名称を女子聖学院中学校·高等学校·聖学院小学校·聖学院幼稚園に改称
- 1960 昭和35年　女子聖学院小学部（現聖学院小学校）を設立
- 1951 昭和26年　私立学校法施行に伴い学校法人聖学院を組織
- 1948 昭和23年　学制改革に伴い聖学院高等学校、女子聖学院高等部を設立

※大学の学部学科、大学院の研究科の増設、改組については割愛します。

聖学院大学チャペル完成

聖学院大学

2004年にチャペルが完成しました。その他に学生食堂、インターネットカフェなどの関連施設が設置され、より充実したキャンパスへと発展しました。香山壽夫先生により設計された本学チャペルは、2005年度日本芸術院賞に選ばれました。チャペル内には女子聖学院短期大学を覚える「短大記念室」が併設されています。2023年10月には短大時代からの念願であったパイプオルガンが完成予定です。

聖学院大学設立

聖学院大学

1988年、聖学院大学は「聖学院大学の理念十ヵ条」のビジョンのもとに政治経済学部政治経済学科から始まりました。2023年現在、3学部5学科3大学院研究科を擁するほか、総合研究所、出版会などが付置されています。地域への協力も活発に行っており、前身の短大時代から継続されている公開講座や、地域ボランティア活動なども盛んです。さらには、情報公開や環境保護などについて自治体行政への協力として本学の教員を多数派遣しています。

聖学院みどり幼稚園設立

聖学院みどり幼稚園

1978年に聖学院大学の前身である女子聖学院短期大学の附属幼稚園として設立されました。地域の幼稚園であると同時に短期大学の実習園としての機能も持っていました。2023年現在も聖学院大学人文学部子ども教育学科の学生が実習を行っています。

keep on
記念祭/ヴェリタス祭

聖学院中高、女子聖学院中高の記念祭（文化祭）、聖学院大学のヴェリタス祭（大学祭）は、
生徒・学生が主体となって企画・運営し、多くの来場者を迎えてきた一大イベントです。
近年は新型コロナウイルス感染の影響で、制限しながらも工夫しながら実施してまいりました。
今年は制限も解除されて、以前にもまして活気のある記念祭・ヴェリタス祭の開催が期待されています。
実行委員の生徒・学生の意気込みをご紹介いたします!

駒込キャンパス 【記念祭】11月2日 木 －3日 祝

聖学院中学校・高等学校

記念祭委員長
阿部柳太郎さん（中央）
副委員長
富岡麟太郎さん（左）、
末永景悟さん（右）

テーマ「NEW ERA ～新しい門～」

昨年まではコロナ禍のため制限がある中での開催でしたが、今年は一般のお客さんも受け入れられるようになります。新しい時代のはじまりであり、私たちは新しい時代の先駆者になるという意味をテーマに込めました。来場者数が増えることを想定しておりますが、展示・企画も昨年より10くらい増える予定です。今年は聖学院法人の創立120周年の年（聖学院中高は創立117周年）であり、その長い歴史の中で最も素晴らしい記念祭を作り上げたいと思っています！

●主なプログラム　学年、有志、クラブ、委員会等による発表と展示
時間は両日とも、10：00～15：30
（最終入場は15：00まで）
※事前にホームページよりご予約ください。

みつばちプロジェクトの商品販売も予定しています

昨年の記念祭の様子

女子聖学院中学校・高等学校

記念祭局長会の
皆さん

テーマ「笑顔満祭～Glitter Your Smile～」

記念祭に関わるすべての方が笑顔であふれ、女子聖でしか創れない記念祭の思い出がいつまでも輝き続けるような記念祭にしたい。」という思いを込めて「笑顔満祭～Glitter Your Smile～」を今年度のスローガンにしました。全ての方に輝く笑顔と満足を届けられるように、生徒みんなで準備を進めています。コロナ禍以前のような女子聖学院ならではの盛り上がりを感じていただけたらうれしいです。

●主なプログラム　学年、有志、クラブ、委員会等による発表と展示
PTA、翠耀会による食事の提供、バザーも再開します。
時間は両日とも9:00～15:30（チケット制）
※事前にホームページよりご予約ください。

高Ⅲ被服選択者によるファッションショー

昨年の記念祭の様子

さいたま上尾キャンパス 【ヴェリタス祭】 11月3日 祝 －4日 土

聖学院大学

ヴェリタス祭実行委員長
政治経済学科3年
荒 光晟 さん

テーマ「三位一体」

キリスト教に「三位一体」という教えがあります。今年は聖学院創立120周年であり、キリスト教の精神を打ち出したいと考えて、ヴェリタス祭のテーマを「三位一体」にしました。企画、運営の中心であるヴェリタス祭実行委員会、学生や教職員など聖学院大学の関係者、そしてヴェリタス祭に来場いただけるすべてのお客様、の三者で一緒に作り上げていくヴェリタス祭にしたいという意味が込められています。今までコロナ禍の制約でできなかったような、演者と一緒にお客さんがステージに上がってパフォーマンスをするなどのプログラムも盛り込んで盛り上げていきたいと思っています。どうぞ、ご期待ください。

●主なプログラム　ステージ：部、サークルによる企画、演目
校舎内：部・サークル、学外有志団体等による展示　など
11/3（祝）10:00～16:30　11/4（土）10:00～18:30（後夜祭含む）

2023年度ヴェリタス祭実行委員の皆さん

聖学院創立120周年記念講演会
研究生活の回顧と展望
魁夷画集をひもときつつ
11月3日 祝　ヴェリタス祭同日開催
13:00～14:30（開場12:30）
講演者　：関根清三
聖学院大学大学院特命教授
講演会場：聖学院大学チャペル

※プログラムは変更の可能性がありますので学校HP等でご確認下さい。

SEIGAKUIN 120 YEARS 《1903→2023》
神を仰ぎ 人に仕う
140th Anniversary of the Disciples' mission to Japan

イベントニュース

event news

聖学院創立120周年を記念して、
下記イベントを予定しています。

TOPICS 1 記念式典 パイプオルガン奉献・記念音楽会

2023年**10月28日（土）**［記念式典10:00～／音楽会11:30～］

- **聖学院大学 チャペル**
- **対象＝教職員**

駒込キャンパス、さいたま上尾キャンパスの教職員が一同に集まり、120周年の歩みを覚えて、記念式典を行います。式典では、120周年の歴史を紡いできた人々の労苦の土台に現在の聖学院教育があることを振り返り、感謝と祈りをささげます。また、未来を見据えた聖学院教育の決意を新たにする場とし、聖学院というブランドを地域や社会全体に知っていただく機会とします。完成したパイプオルガンを用いた音楽会も開催します。

TOPICS 2 映画会 ー赤い靴の女の子ー

駒込キャンパス

2023年**10月13日（金）**
13:30-15:30

- **聖学院中高 5階ガイホール**
- **対象＝在校生・保護者・教職員**

さいたま上尾キャンパス

2023年**10月19日（木）**
15：20～17：20
（4限・5限の約2時間）

- **聖学院大学 教授会室**
- **対象＝学生・保護者・教職員・教会関係者**

日本が貧しかった時代、愛する我が子をやむを得ず手放さなければならないことがありました。秋田の地を舞台に宣教師によって引き取られた女の子と関わる人々が織りなす物語を見つめながら、聖学院の源流となるディサイプルス派の宣教師や時代背景に思いを寄せます。

TOPICS 3 聖学院中高・女子聖学院中高 合同記念礼拝

高校 2023年**10月30日（月）** 8:50～9:35
中学 2023年**10月30日（月）** 11:40～12:25

- **聖学院中学校・高等学校 講堂**
- **対象＝在校生・教職員**

TOPICS 4 聖学院小学校・幼稚園 合同記念礼拝

2023年**10月26日（木）** 10:00-11:00

- **聖学院中学校・高等学校 講堂**
- **対象＝在校生・教職員**

TOPICS 5 聖学院みどり幼稚園 記念礼拝・音楽会

2023年**10月30日（月）** 11:00-12:00

- **聖学院大学 チャペル**
- **対象＝在校生・教職員**

発祥の地を訪ねて

聖学院創立120周年を覚えて、
聖学院高等学校GIC宗教文化ゼミと女子聖学院高等学校有志が
「歴史探訪プロジェクト」を組織し、聖学院の源流について学びを深めています。
小倉義明・元聖学院院長の講演と文献調査の2回の事前学習を経て、
2023年7月22日（土）に聖学院、女子聖学院発祥の地を辿る
フィールドワークを実施しました。

事前学習の様子。

探訪01 ▸ 本郷

聖学院中高の前身は1903年創立の聖学院神学校。聖学院神学校は本郷基督教会を仮校舎として開校しました。当時の教会の付近だと考えられる本郷四丁目を訪ねました。

探訪02 ▸ 築地

築地居留地研究会の方にご案内いただき、史跡を訪ねるツアーを実施。聖路加国際病院前にて。

女子聖学院発祥の地

「女子聖学院発祥の地」と記された碑

国際紙パルプ商事株式会社の敷地内に「女子聖学院発祥の地」と記された碑が建てられています。当時、築地十四番館Aと呼ばれた区域です。築地外国人居留地には宣教師たちによって建てられた多くの学校や領事館の跡地が存在します。近くに青山学院や明治学院、立教女学院など様々な学校の発祥の地がありました。
明治初期に日本の教育のために命を削った宣教師や当時の築地外国人居留地の街並みに、それぞれ思いを馳せました。皆さんも一度、女子聖学院の記念碑を見に築地の地を訪ねてみてはいかがでしょうか。

まだまだあります！

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

聖学院大学

「おかえりプロジェクト」で震災を経験した東北の若者と協働
～第32回東北ボランティアスタディツアーを実施～

8月12日（土）から14日（月）にかけて、東北ボランティアスタディツアーを実施しました。本学は東日本大震災直後から継続的に復興支援活動を行ってきました。ツアーでは震災当日津波にのまれながらも生還した只野哲也さんを始め、石巻市立大川小学校の出身者らで立ち上げた「Team大川-未来を拓くネットワーク-」と連携し、震災遺構となった大川小学校でイベントを実施しました。

これまでのツアーでチーム大川と連携・交流を深めてきました

聖学院大学

大学評価会議　開催！
～学生が主役の大学・地域に開かれた大学形成を目指して～

8月2日（水）、「学生が主役の大学・地域に開かれた大学形成を目指して」をテーマに大学評価会議を開催しました。地元自治体及び地域の経済団体等の外部委員より、本学の学生支援体制や地域連携活動の在り方、地域からの支援をいただいて展開できる学生の活動の可能性について意見・評価をいただきました。今後は更に多様な人々に開かれた大学を目指し、一層の大学教育の拡充を目指します。

今年はキャンパスツアーを実施し、様々な活動に取り組む学生の声を聞いていただきました

聖学院大学出版会

新刊のご紹介

聖学院大学人間福祉スーパービジョンセンター（以下SVC）編『精神保健福祉士の専門性構築の経過とスーパービジョン』（人間福祉スーパービジョン研究1）が発刊されました。本書は長年にわたりソーシャルワークにおける専門性の重要性を説き、実践してこられた柏木昭氏（日本精神保健福祉士協会名誉会長）と大野和男氏（同協会元会長）による対談を収録。現在に続く専門性構築とその原点となった歴史的問題が熱く語られます。SVCは、ソーシャルワークに携わる卒業生支援のために設置され、個別スーパービジョンやスーパーバイザー支援制度などのプログラムを提供しています。

聖学院大学総合図書館

清水均名誉教授講演「コロナ禍は日本文化に何をもたらしたのか」

9月9日（土）、桶川市のOKEGAWA honプラス+にて、「コロナ禍は日本文化に何をもたらしたのか～村上春樹と短歌・推し活・VTuber～」という演題で清水均名誉教授に講演いただきました。コロナ禍で見いだされた「新たな可能性」について改めて考える機会を持ちました。

※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

女子聖学院中学校・高等学校

4年ぶりにクラブ体験も実施『夏の女子聖体験日』

7月17日（月・祝）、「授業」と「クラブ」を体験する『夏の女子聖体験日』が開催されました。今年は「教科横断型授業」や「レゴ®を使ったワークショップ型授業」などバラエティに富んだ内容の授業が実施されました。参加された方のアンケートでは90％の方が『学校全体の雰囲気・生徒の様子』が魅力的だと回答されており、女子聖学院の魅力を存分に伝え、満足していただけた会となりました。

吹奏楽部の楽器体験

生徒・教師・パパプロみんなでつくりあげる体験日

女子聖学院中学校・高等学校

3日間の共同生活でチームビルディング『中1アドベンチャーキャンプ』

7月24日（月）～26日（水）、中学1年生を対象とするアドベンチャーキャンプが、千葉県鴨川市で行われました。初日は、自分や友達の賜物について考えるプログラムと、学年レクリエーションが行われ、2日目はプロジェクトアドベンチャージャパンのファシリテーターの指導のもと、プロジェクトアドベンチャーに取り組みました。「自ら一歩を踏み出す」「自分が思っていることを伝える」「他者が思っていることを受け取る」と言う3つの目標を、協同して課題に取り組みながら体験しました。夜はキャンドルサービスを実施し、最終日はマザー牧場でカレー作りに挑戦するなど有意義な3日間を過ごしました。

プロジェクトアドベンチャーのワークショップ

聖学院中学校・高等学校

「海洋研究3Dスーパーサイエンスプロジェクト」参加者に選出 3D技術を活用した海洋生物研究に挑戦

一般社団法人日本3D教育協会が主催する「海洋研究3Dスーパーサイエンスプロジェクト」入学式が7月31日（月）に行われました。このプロジェクトでは中学生が海洋生物の専門家たちのアドバイスを受けながら、全13回の授業の成果として2024年3月に研究発表会を行います。3期目の開催となる今回、多数の応募の中から中学３年生の永井健太さんが選出されました。本校からの参加は岡田和真さん（高1）に続く２人目で、多様なクリエイティブツールを備えた「SEIG FAB LAB（校内施設）」で創作活動を楽しむ同志です。3Dプリンターを活用し誰かの役に立つものを作りたいと意気込む永井さん。聖学院中高では”情報にワクワクする”をテーマとした情報プログラミング、高校新クラスGICのSTEAMなどテクノロジーを活用した教育にも力を入れています。

選出された永井健太さん

聖学院小学校

真夏の日本から真冬のニュージーランドへ

7月20日（木）～27日（木）、2～5年生の児童とその家族が参加し、ニュージーランド・ウェリントンでのショートステイを実施しました。「他の土地から来た人を他人ではなく家族として迎えます」というマオリの儀式（welcome ceremony）で始まり、子どもたちだけでなく同行した保護者も、ミラマークリスチャンスクールで充実した時間を過ごしました。特にミラマーの保護者のお家を訪問するというプログラムでは、全員が感動的な夜を過ごすことができました。バディーと手をつないで歩いたZealandia（自然保護地区）への遠足、バスケットやレゴの授業、算数も一緒に勉強し、マオリ文化の学習も貴重な体験でした。

※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

聖学院幼稚園

お楽しみ会・夏　シャボン玉ショー

年に2回ある保護者の方から子どもたちへのプレゼントであるお楽しみ会。今年は楽しいシャボン玉ショーでした！（7月13日（木）開催）大きいシャボン玉、小さいシャボン玉、形もいろいろ、いろいろな道具を使ったシャボン玉が出来るのを見て、ホールいっぱいに舞うシャボン玉に大興奮の子どもたちでした。とても大きなシャボン玉の中に入った子どもたちや先生もいました。そして、ショーの後はお庭でシャボン玉遊びをしました。すぐにできた子もいれば、なかなかできずに真剣な顔の子も。風が吹いて空へ飛んでいく様子をじっと見たり、追いかけたりと楽しい時間を過ごしました。

学校法人 聖学院

聖学院中高、女子聖学院中高、聖学院小学校の3校がユネスコスクール・キャンディデートに承認されました

聖学院中高、女子聖学院中高、聖学院小学校は、2023年2月までのユネスコスクールのチャレンジ期間を満了し、ユネスコスクール加盟国内審査を申請していましたが、2023年7月末日、3校とも審査を通過してユネスコスクール・キャンディデートに承認されました。

ユネスコの理念を学校現場で実践するための国際的なネットワークASPnetへの加盟が承認された学校を日本では「ユネスコスクール」と呼び、2023年3月時点で、1,115校が加盟しています。

聖学院みどり幼稚園

4年ぶりの夕涼み会

8月25日（金）、4年ぶりとなる夕涼み会を開催しました。子どもたちは始まる前から「お祭りだ！お祭りだ！」とずっと楽しみにしていたようです。当日はゲームコーナーや製作のコーナー、16ミリの映写コーナーなどに加え、園庭ではフランクフルトやおにぎり、かきごおりなどの販売も行いました。それぞれが焚き火で炙（あぶ）って、ソースをかけていただくマシュマロは大好評でした。たくさんの卒園生も足を運んでくれました。みどり幼稚園が人々をつなぐ大切な場所であることを感じることができた、夏の終わりの幸せなひとときでした。

編集後記

今年は120周年という節目にあたります。この機会に聖学院の歴史を調べ確認したいと考えました。聖学院のルーツを探りその軌跡を辿る取材を重ねていくと、その源流を作った外国人宣教師たちの命がけの努力の上に今の聖学院があることが分かりました。それを聖学院の各校に通われている皆様、保護者の皆様にぜひご紹介したいという思いで今号を制作しました。教職員の中には歴史に詳しい方もいると思いますが、巻頭の座談会記事の中に、新たなる発見があるかもしれません。有志の生徒たちが足を運び、調査・探訪してきた発祥の地、機会がありましたら一度訪ねてみてはいかがでしょうか！
次ページの秋田探訪の記事もぜひお読みください。
今号が読者の皆様にとって、聖学院の歴史に想いを馳せる契機となればうれしく思います。（Pman）

秋田探訪

Explore Akita 2023.08.07～08.09

創立120周年特別企画

聖学院の源流を探る旅

勉強会を重ね、ディサイプルス派の宣教師たちの足跡を3人の教員が辿りました

聖学院・女子聖学院はともに米国プロテスタントキリスト教ディサイプルス派の宣教師たちによって創立しました。彼らが日本で最初に宣教を始めたのは秋田の地でした。
その宣教がどれほど大変で困難な道のりであったか、どんな熱意を持って、どのような理想を掲げて宣教したのか、それが後に聖学院創立につながるスピリットとしてどのように引き継がれていったのかを確かめるため、120周年実行委員の3人の教員が、事前勉強会を重ねて、現地で宣教師たちの足跡を辿ってきました。

事前勉強会の様子

秋田探訪メンバー

写真右から
清水 広幸（120周年事業実行委員長・聖学院中高副校長）
久保 哲哉（聖学院中学校・高等学校チャプレン）
赤田 直樹（聖学院みどり幼稚園園長・チャプレン）

秋田港

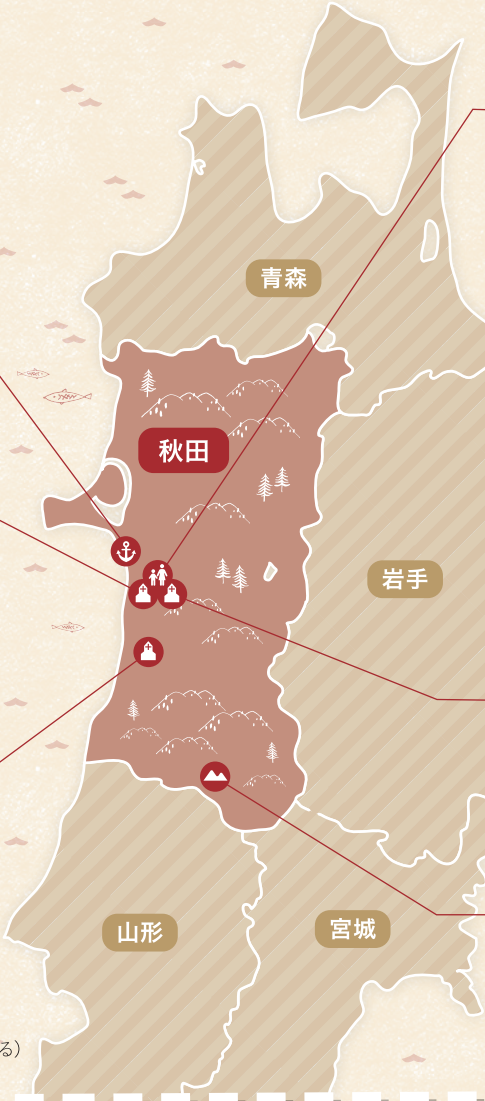
1884年5月、ガルスト・スミス宣教師が最初に接岸したと考えられる付近（秋田港）

スミス夫人の墓

宣教した異国の地で亡くなったジョセフィン・スミス宣教師（スミス夫人）
当時の秋田伝道の過酷さに思いを寄せる

本荘教会にて歴史的資料を調査
（1908年（明治41年）、石川角次郎、平井庸吉、バーサ・クローソンが一堂に会する）

日本基督教団 本荘教会



秋田の赤い靴の像

刑務所で生まれた女の子を引き取り、横浜の波止場から船に乗ってアメリカへと渡ったハリソン宣教師とその女の子の像

日本基督教団 秋田高陽教会

宣教師の軌跡を学ぶ

院内銀山

院内銀山まで伝道の足を伸ばしたガルスト宣教師

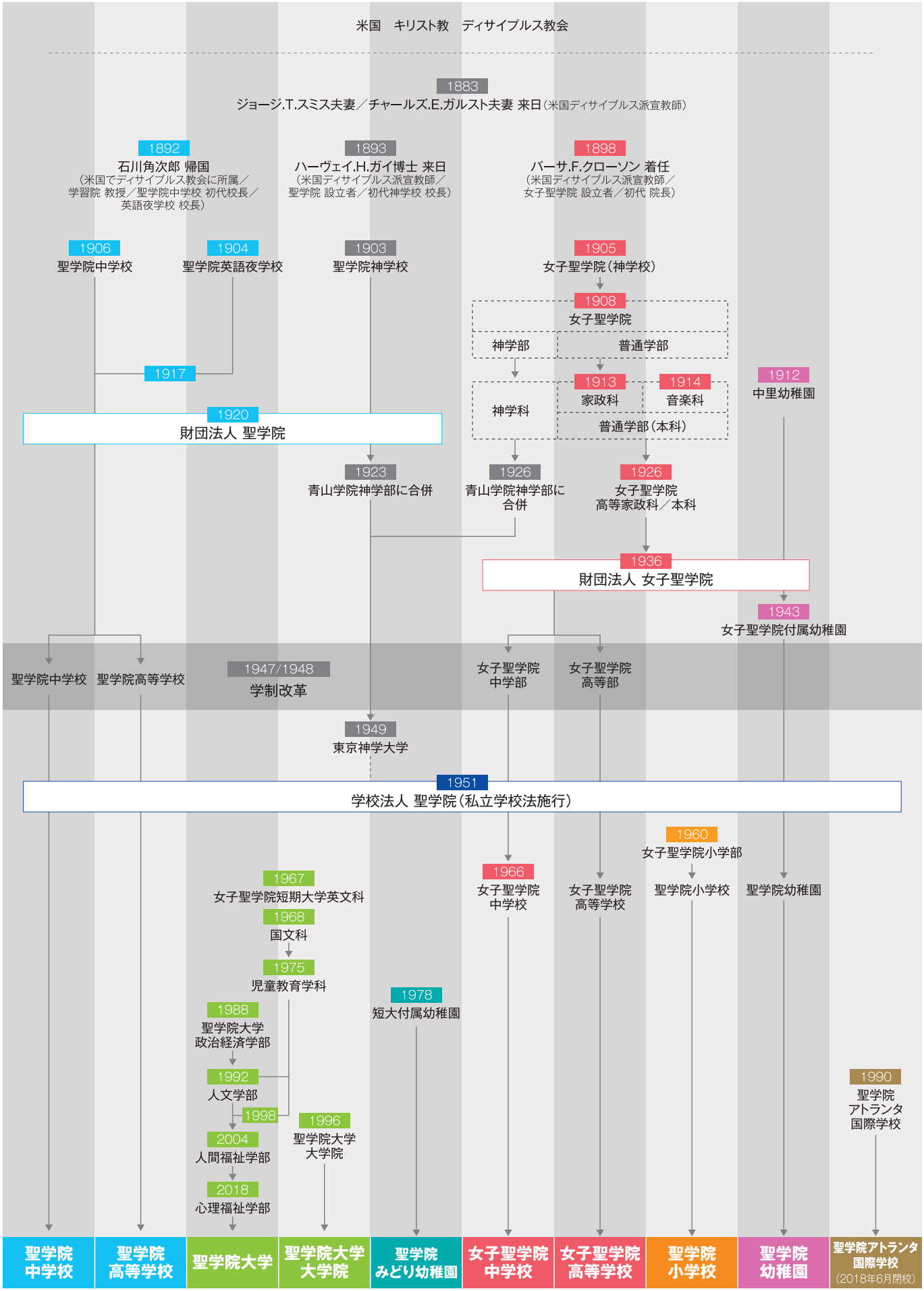
探訪後記

1884年5月、秋田港に到着したガルストとスミス両宣教師が立ったと思われる旧い堤防から市内を見回しました。日本伝道に燃えた二人は「まだキリスト教が伝道されていない地」として東北・秋田を選びました。どれほどの期待と不安を抱えたのでしょうか？ 米国と生活習慣も考え方も大きく異なるその地に飛び込み、農民や子どもたちに懸命にイエス・キリストの言葉を伝えたのです。その証はディサイプルス派教会（秋田高陽教会等）が地域に根差した礼拝を守っていることに見ることができます。更に幼児教育を通じ人を育て、仕える姿も見ました。
140年経過しても大切なものは今も受け継がれています。聖学院ディサイプルスの源流に触れた濃密な三日間でした。

清水広幸

聖学院の歴史

History of Seigakuin University & Schools



EPISODE #22

聖学院歴史探訪

#22 聖学院教育の歴史
-聖学院の創設と発展 女子聖学院 2-

バーサ・F・クローソン※1

クローソンは約20年間奉仕した後、1924年、院長を教頭であった平井庸吉に譲り女子聖学院を去ることになります。しかし、終生女子聖学院のために祈り続け、卒業生たちを愛し続けられました。創立50周年を迎えた時（1955年）、クローソンはアメリカの老人ホームからテープに吹込んでメッセージを送ってきました。すでに86歳でありました。その一部をご紹介しましょう。

「私はあなた方を愛し尊びます。教職員の皆様、宣教師の皆様、家庭の皆様、われわれの学院の尊厳を永遠に高めるための戦いを共に戦おうではありませんか。（中略）女子聖学院の将来はどうでしょうか。私は只、神の御手と、現在これにたずさわる人々の手にゆだねます。あなた方はあなた自身の歴史を書かねばなりません。（中略）神様の示し給う道に進んで行って下さい。なおまた、神の感化が永久にありますように祈ります。すべての上に神の御祝福を祈ります」

この2年後、バーサ・クローソンは不帰の人となりました。88歳でありました。

後を引き継いで基礎を据えたのが平井庸吉であります。平井庸吉は1947年に召天するまで院長の重責を果たしました。第二次世界大戦をはさんだ最も困難な時期に女子聖学院を守り、育てたのです。

（次号に続く）

出典：聖学院キリスト教センター編『聖学院の精神と歴史』聖学院ゼネラル・サービス、2006年版（出典より一部変更）

※1イラスト制作：株式会社ジャパンシステムアート

学校法人 聖学院
理事長／小池　茂子　院長／山口　博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2　Tel 03-3917-8351
ホームページ https://www.seig.ac.jp/　E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学
・政治経済学部／政治経済学科
・人文学部／欧米文化学科　日本文化学科　子ども教育学科
・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／小池　茂子　創立／1988年　〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1　Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院
政治政策学研究科／文化総合学研究科／心理福祉学研究科
創立／1996年　〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1　Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園
園長／赤田　直樹　創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820　Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校
校長／伊藤　大輔　創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1　Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校
校長／安藤　守　創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2　Tel 03-3917-2277

聖学院小学校
校長／佐藤　慎　創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1　Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園
園長／田村　一秋　創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2　Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて
クレジットカード（JCB、VISA、MasterCard、アメリカン・エキスプレス、ダイナースクラブ）での寄付が可能です。下記URL、QRコードにアクセスください。
https://www.seig.ac.jp/asf/

住所変更・広報誌の発送停止・PDF配信への変更・お問い合わせ
https://www.seig.ac.jp/asf/contact/
学校法人聖学院ASF事務局
Tel 03-3917-8530（月～金 9:00～17:30）